しらさぎ

求めて学ぶ　考えて行う　自ら鍛える

目黒区立第八中学校
学校だより　NO.25
（通巻９４号）
平成２８年（2016）
１月８日（金）

謹賀新年

『アリの目　鳥の目』

校長　飯野　博史

私は毎年、江戸川土手に初日の出を見に行きます。今年は天候が穏やかだったせいか、例年よりも多くの人がご来光を待ちました。６時５３分、初光を拝むことができました。その足で柴又帝釈天へ初詣、八中の発展と３年生の進路決定を祈願してきました。

■年頭にあたって「今を大切に」

今日の朝礼で「今を大切に」という書き初めを示して、次のように話しました。「３月までの後期後半、登校日数を確認したところ、１，２年生は５３日、３年生は４９日でした。あっという間に過ぎていきます。この期間は一年間のまとめをし、さらに来年度に向けての準備をする大変重要な時期です。３年生は中学校生活のまとめをすると同時に、新しい生活に向けての準備をする大切な時期です。どの学年も４月にいいスタートがきれるように、一日一日を大切に、今を大切にしていこう。」生徒たちはよく聞いていました。充実した生活が送れるように指導していきます。ご支援よろしくお願いいたします。

■北星鉛筆株式会社

昨年末、私の住んでいる地域にある「北星鉛筆株式会社」の代表取締役 杉谷和俊さんの講演を聴く機会がありました。会社創立は昭和26年、創業者である祖父の「鉛筆は我が身を削って人のためになり、真ん中に芯の通った人間形成に役立つ立派な職業だから、利益にとらわれないで、鉛筆のある限り、家業として続けるように（鉛筆の精神）」という言葉を守り、会社経営を続けています。鉛筆全盛時代には年間14億本もの需要があったそうですが、今ではシャープペンシルなどにおされ、せいぜい2～3億本程度の需要となってしまいました。北星鉛筆では現在、毎日10万本の鉛筆を製造しています。鉛筆の需要が落ち込む中、どうやったら祖父の「鉛筆の精神」を守り会社を存続していけるのか、杉谷さんは考え抜きました。様々なチャレンジが始まりました。

古い工場を建て替える際に、鉛筆製造をアピールするため作業工程を全てガラス張りにしました。小学生の社会科見学に開放し、子供たちの鉛筆に対する関心を高めました。

さらに鉛筆を製造する過程で出る「おが屑」を再商品化することを思いつきました。鉛筆製造時に約40％が「おが屑」となって排出されているそうです。以前は銭湯や工場の燃料として燃やしていました。「捨てるだけのこのおが屑を何とかできないか…」研究を重ね、「おが屑」をパウダーにする粉砕機の開発に成功しました。このパウダーからエコロジー「ねんど」や「木になる絵の具」「着火薪」など新たな製品を次々に開発、ヒットさせました。豊かな発想力、チャレンジ精神が産業廃棄物を資源に変える、循環型鉛筆産業システムの構築、再商品化事業の成功へとつながっていきました。

杉谷さんのお話で心に残る言葉がたくさんありました。「会社を何とかしなくてはいけない、目の前の状況を打開していくためには『アリの目』が必要です。しかし、『アリの目』だけでは経営は行き詰まってしまいます。そこで大切なのは、環境問題や木材資源の問題、世界の鉛筆事情などグローバルな思考をすること、『鳥の目』で視野を拡大することです。アリの目線と鳥の目線をもつことが大切です。将来は火力発電『おが屑発電』で世界の貧困解消と地球温暖化の解決を図りたい。」ますます意気盛んでした。

教育にも『アリの目』と『鳥の目』が必要と感じました。目の前の課題解決はもちろん、子供たちの豊かな将来を見据え、学校経営に取り組んでいく決意を新たにしました。

『命と人権を考える月間』取組報告（４）

12月7日（月）人権講演会「ハンセン病」を開催しました。講師として国立ハンセン病資料館学芸部社会啓発課主任 金 貴粉さんをお招きしました。生徒たちにとって馴染みのない「ハンセン病」とはどんな病気なのか、「ハンセン病」が人権問題とどう関わっているのか、スライドを使って分かりやすく説明してくださいました。講演会後の水倉祥太朗くんの「お礼の言葉」と生徒たちの感想文を紹介します。

◎お礼の言葉　生徒代表　水倉祥太朗

僕は、ハンセン病という病気についての知識は多少ありましたが、その差別については今日改めて知りました。

伝染病ではありますが、感染力はとても弱いのに、国のまちがった政策などによって差別をされて、子供をつくれないようにされたり、隔離されたりしたのはとてもひどいことだと思いました。

また、療養所に入るときに、これまで使っていたお金を療養所内でしか使えないお金と取り替えさせられたり、病人なのに労働させられたり、まるで囚人のような扱いを受けたのはとてもひどいことだと思います。

今、日本ではハンセン病はなくなり、治る病気だということをみんなが知ったのでハンセン病による差別は少なくなりつつありますが、元ハンセン病の患者の方たちに対する偏見や差別は完全にはなくなっていません。ハンセン病のように「自分の力ではどうしようもないこと」で差別を受けたり、いじめられたりすることはまだ多いと思います。背の高さや運動能力など、主に「外見」によるものが多いと思います。相手のことがよく分かっていないので「外見」で相手を判断し、偏見や差別意識をもってしまうのだと思います。相手のことを良く理解すれば、「外見」で誤った判断をすることはなくなると思います。今後は相手のことをよく知り、そしてよく考えて行動できるようにしたいと思います。

今日はお忙しい中、私たちのためにハンセン病による差別について講演してくださり、ありがとうございました。

・私は今まで「ハンセン病」と聞くと名前だけ知っているくらいでした。しかし、ハンセン病がどのような病気なのかや歴史を知ることによって、ハンセン病患者の方々への差別が最近まで続いていたことを知り、驚きました。また、本当ならば安静にするところでありながら、収容所のように閉じ込められていた事実があったことを聞いて、悔しいような気持ちにもなりました。この講演会を聞いて、誤った過去を二度と繰り返さないことが大切なのだと思いました。私の身近にも差別してしまうことがあるので、意識して生活したいと思います。今日はありがとうございました。（１年生）

・僕は今回、金さんのお話を聞いて様々なことを思いました。一つは差別はいけないということです。差別は心を傷つけてしまうし、ハンセン病の患者さんに対するように人の人生も傷つけてしまう。傷ついた人はなかなか元には戻れない。だから差別はなくさなければならないと思う。二つめは、よく分かってから行動するということです。本当はあまり感染しないのに隔離するのはおかしいと思う。みんなが差別しているから自分もやろうとか、そういった気持ちはなくしていかなければならないと思う。病気にかかった人には何の罪もない。何かしたからハンセン病になってしまった、ということはない。だから僕たちは自分が病気にかかってしまったときのことを考えなければならないと思う。（２年生）

・昔の人たちがハンセン病になった時は、療養所に入れられてごはんの量はとても少なかったり、お金も療養所の中でしか使えなかったり、自由がありませんでした。とてもつらいなぁと思いました。今はハンセン病を治す薬があってすぐに治りますが、昔のことを聞いてとてもかわいそうだなぁと思いました。差別をなくすためには人の思いやりが大切だなぁと感じました。ありがとうございました。（３年生・Ｅ組）